慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Spectator violenceとしてのフーリガニズム
Sub Title	Football Hooliganism
Author	三井, 宏隆(Mitsui, Hirotaka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1992
Jtitle	哲學 No.93 (1992. 1) ,p.279- 307
JaLC DOI	
Abstract	In recent years football hooliganism (football crowd violence) has become a growing international problem. During the last World Cup in Italy, the newspapers reported that the organizing committee was forced to spend more than 80 billion lira on anti-hooligan measures. It was the most expensive World Cup in history. Among all the hooligans, the English are ranked the worst in Europe by the Press. Why has modern football become beleaguered by hooliganism ? What is the cause of it ? As part of a study on spectator violence, the historical change of hooliganism in England is reviewed in this paper.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000093-0279

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Spectator violence としてのフーリガニズム

三　井　宏　隆*

Football Hooliganism

Hirotaka Mitsui

In recent years football hooliganism (football crowd violence) has become a growing international problem. During the last World Cup in Italy, the newspapers reported that the organizing committee was forced to spend more than 80 billion lira on anti-hooligan measures. It was the most expensive World Cup in history.

Among all the hooligans, the English are ranked the worst in Europe by the Press. Why has modern football become beleaguered by hooliganism? What is the cause of it? As part of a study on spectator violence, the historical change of hooliganism in England is reviewed in this paper.

* 慶應義塾大学文学部助教授（人間科学）

世界的スポーツとしてのフットボール

世界で一番人気のあるスポーツは何であろうか．思いつくままにあげてみると，野球，テニス，フットボール（サッカー），ラグビー，ボクシング，バスケットボール，バレーボール，柔道といった所があがってくるけれども，やはりトップはフットボール（サッカー）であろう（表 1）．

そのメインイベントは 4 年ごとに開催されるワールドカップ（W 杯）である．第 14 回大会の場合（1990 年 6 月 8 日～7 月 8 日，イタリアで開催），有料入場者数は全 52 試合で 2,515,168 人，テレビ視聴者数は延べ 265 億人に上るとのことである（朝日新聞，1990 年 7 月 10 日朝刊）．

無論，これだけの大試合となれば，各国の応援団の熱気も弥が上に高まる．勝てばまだしも，負ければ大変な騒ぎである（図 1）．

たとえば，次のような具合である．

表 1. W 杯決勝戦成績

年度	優勝	スコア	準優勝	開催国
1930	ウルグアイ	4—2	アルゼンチン	(ウルグアイ)
1934	イタリア	2—1	チェコ	(イタリア)
1938	イタリア	4—2	ハンガリー	(フランス)
1950*	ウルグアイ	2—1	ブラジル	(ブラジル)
1954	西ドイツ	3—2	ハンガリー	(スイス)
1958	ブラジル	5—2	スウェーデン	(スウェーデン)
1962	ブラジル	3—1	チェコ	(チリ)
1966	イングランド	4—2	西ドイツ	(イングランド)
1970	ブラジル	4—1	イタリア	(メキシコ)
1974	西ドイツ	2—1	オランダ	(西ドイツ)
1978	アルゼンチン	3—1	オランダ	(アルゼンチン)
1982	イタリア	3—1	西ドイツ	(スペイン)
1986	アルゼンチン	3—2	西ドイツ	(メキシコ)
1990	西ドイツ	1—0	アルゼンチン	(イタリア)

(注) * は決勝リーグ最終戦
(読売新聞，1990 年 7 月 10 日朝刊より)

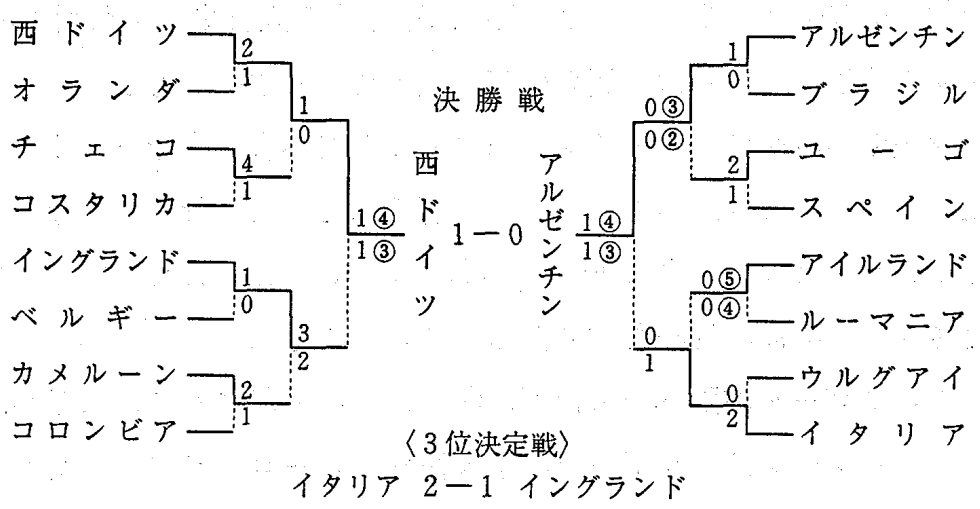


図 1. 第14回ワールドカップ決勝トーナメント (円内数字はPK戦の結果)
(朝日新聞, 1990年7月10日朝刊より)

非難避けて？ 姿隠す　サッカーのワールドカップ (W杯) で, 8強入りも果たせなかったブラジル・チームのラザロニ監督が, 27日の早朝の帰国以来, ファン, マスコミの非難の集中砲火を避けようと姿を隠している. いじめられるとわかっているために,「敗戦翌日から, 監督の子供たちは学校を休んでいる」とか. 家族は「監督は旅行. 7月2日か3日に会見する」と説明しているが, 各マスコミは「家に閉じこもっている」と報じている. 14,000万国民が代表チームの監督, といわれるほどサッカー通の多い国. 批判を浴びても攻撃の作戦を最後まで変えようとしなかった監督に, 自宅近くでは, 子供たちまで「隠れてないで, 説明しろ」,「ラザロニの頑固者」などと怒りの落書きだ (朝日新聞, 1990年7月1日朝刊).

観衆の祈り, 伊に重圧　大会史上最多となった7度目の延長戦でも決着はつかず, 今大会3度目のPK戦へ. イタリアゴールを守るのは, この日でイングランドのシルトンの持つ無失点時間記録を破ったばかりのゼンガ. 対するアルゼンチンは, 1次リーグで負傷退場している正GKブンピードに代わって出ているゴイコエチェア. すべての条件でイタリア有利と思われた. が, 勝負はそうはいかなかった. イタリアのバレージから始ま

った敵，味方交互のけり合いは，互いに譲らず3人目までが順調に決めた．イタリア選手がける時は，観衆は祈る気持ちで静まる．ところが，アルゼンチン選手の場合は，ブーイング（口笛などで不満の声をあげる）のあらしだ．しかし，これが逆に，イタリア選手にとっては計り知れない重圧となっていく．イタリアのビチーニ監督はいう．「われわれはいつも国民を満足させるために，神経をすり減らして戦ってきた」．イタリアの 4 人目ドナドニはゴール右隅へ狙ったが，GK にズバリ読まれて，はじかれた．続くアルゼンチンはマラドーナ．準々決勝のユーゴスラビア戦では失敗したものの，今度は落ち着いて決めた．イタリアの最後は，途中から出場していたセレナ．左足内側でゴール右をついたものの，GK ゴイコエチェアの読みがまたも的中．左わき腹で止め，こぼれたボールもゴールラインわずか手前で止まった．「最後のボールを抑えた時は，からだ全体が身震いしたよ」とゴイコエチェアは興奮がさめやらない（朝日新聞，1990 年 7 月 4 日夕刊）．

イタリア人が英国人を襲撃　W 杯サッカー，43 人逮捕　ワールドカップ準決勝イングランド対西独戦を翌日に控えたトリノで 3 日夜，英国人ファン約 500 人がキャンプする公園をイタリア人のグループが襲撃，警官隊が催涙ガス弾を使って騒ぎを鎮圧したが，双方にけが人多数を出し，イタリア人 43 人が逮捕された．アルゼンチン戦の敗退に怒ったイタリア人ファンがその捌け口を，「フーリガン（暴力的ファン）」として評判の悪いイングランドのファンに向けたものと警察はみている．目撃者によると，はじめ約 100 人のイタリア人が公園の門を壊して侵入，寝ていた英国人たちに石や空きびんを投げ，乱闘となった．イタリア人の数はその後，数倍にふくれあがった（朝日新聞，1990 年 7 月 5 日朝刊）．

東も西も街頭で熱狂　ベルリン　サッカーのワールドカップ大会決勝

のあった8日夜（日本時間9日未明），東西ベルリンの街頭は数万人の若いファンが繰り出し，西独チームの優勝に熱狂．16年ぶりの世界一にサッカーファンは夏の夜の統一気分に酔った．東ベルリンの東独国会議場そばの広場に特設された特大の野外カラーテレビ同時中継画面には，10,000人以上が集まった……西独の得点で，夜空に赤や緑の花火が飛び交った．鷲の西独国章入りの国旗一色で「ドイッチュラント（ドイツ）」と繰り返し，「ディエゴ（マラドーナ・アルゼンチン主将），ディエゴ，わっはっは」とやゆ．勝利の瞬間，ビールびんを地面にたたきつけ，群衆の中では爆竹が鳴って騒然とした．6車線の車道にまで人があふれたが，トラック5台に分乗した警官隊は付近で待機したままで，若者たちが騒ぐにまかせていた……一方，西ベルリンの目抜き通り，クーダムもファンであふれ，テレビニュースはいち早く「数万人」と伝えた．花火が建物に突き刺さりボヤ騒ぎも起こった．出動したはしご車を群衆が占拠した．両ベルリンとも東西両方のナンバーの車が，深夜まで警笛を鳴らし続けた（朝日新聞，1990年7月9日夕刊）．

しかしながら，応援も度が過ぎると，“贔屓の引き倒し”にもなりかねない．その一例が“football hooliganism”である．フーリガン（hooligan）といった呼び名は，1970年頃から新聞やテレビで使われるようになったけれども，その語源は19世紀にロンドンのEast Endに住んでいた無頼なアイルランド系家族の姓Houlihanに由来するとのことである．言わば，「ごろつき」とか「チンピラ」といった類の言葉である．しかしながら，彼らはそれまでは，“ruffians”とか“rowdies”と呼ばれていたのである（Marsh, 1976）．

フーリガンの場合，味方チームの勝ち負けよりも，敵方チームのファンとの戦闘が主目的であり，その結果，多数の死傷者が出るといったことも珍しくないのである．

たとえば，1985 年 5 月 11 日には英国のブラットフォードのサッカー場で火災により 52 人が死亡し（発煙弾が投げ込まれたとの説もある），1989 年 4 月にはシェフィールドのサッカー場のフェンスが崩れ，観客74人が死亡したとのことである．施設の老朽化，警備の不手際とともに，ファンの騒動が原因と言われている．また，“Heysel の悲劇”は 1985 年度欧州チャンピオンズカップの決勝戦が行われることになっていたベルギーの首都ブリュッセルのヘーゼル（Heysel）サッカー競技場の名前をとったものであるが，試合開始前の騒動で 300 名近い死傷者が出る大惨事となってしまったのである．

新聞記事によれば，「29 日夜，ベルギーの首都ブリュッセルのヘーゼル・サッカー競技場で，英国（リバプール）とイタリア（ユベントス）による 85 年度欧州チャンピオンズカップの決勝戦開始前に，興奮した数千人の英国ファンがイタリア側応援席めがけて殺到し，その重みでコンクリート塀が倒れ，下敷きとなった 39 人が死亡，9 人が重体，250 人を超える重軽傷者が出る大惨事となった．300 人近い死傷者を出すサッカー騒動は欧州で例がない．……欧州チャンピオンズカップは欧州サッカーの最高峰に位置づけられていることもあって，同競技場は同日昼すぎから約 6 万人のファンでふくれあがっていた．暴動は試合開始予定時刻の同日午後 8 時 15 分（日本時間 30 日午前 3 時 15 分）の 1 時間前に起きた．きっかけは英国，イタリア両国のファンの間で起きたこぜりあい．これに続いて 1 万 6 千人にふくらんだ英国応援席からファンがフィールドに降り始め，警備人により隔離されたイタリア応援席へ殺倒．制止する 2 千人近い機動隊，制服警官も入りまじり英国，イタリアファンの大衝突となった．押されたコンクリートの壁が重さに耐えきれず倒れ，多数の観客が下敷きとなった．犠牲者およびけが人は圧倒的にイタリア人が多い．死者のうち 29 人がイタリア人，5 人が英国人，1 人がフランス人，4 人は国籍不明」とのことである（毎日新聞，1985 年 5 月 30 日夕刊）．

この事件に対する制裁措置として，欧州サッカー連盟 (UEFA) は，すべての英国クラブチームの欧州トーナメントへの出場禁止を決定したのである．この措置が解除されるのは 5 年後の 1990 年 7 月 10 日のことであるが，その時点においてもまだ，当事者の一方であるリバプールに対しては，さらに 3 年間の出場停止が課されたのである．

また先のワールドカップイタリア大会においては，フーリガン対策に要した費用は 800 億リラ (約 102 億 5 千万円)，動員された警官は 5 万人以上とのことであった (毎日新聞，1990 年 7 月 11 日朝刊)．この金額は入場料の売り上げ総額約 1,709 億リラ (約 219 億円) の 5 割弱にも及ぶのである．

ところで，“football hooliganism” は英国だけの問題ではなく，程度の差はあれ，どこの国にでも見られる現象である．その意味では hooliganism もまた，定義の仕方次第である．英国人もかつてはサッカー試合の勝ち負けが戦争騒ぎに発展するような中南米諸国の政情を嘲笑い，ヨーロッパ大陸諸国にみられた観客のマナーの悪さにあきれかえり，そうした国々との対外試合の禁止も検討していたのである．

それが立場を逆転するのは 1960 年以降のことであるが，本稿ではその社会的背景に焦点をあてて考察を進めることにする．

フットボールの社会史

Magoun, E. P. Jr. (1983) の “History of football from the beginnings to 1871” (忍足欣四郎訳「フットボールの社会史」岩波新書 1985 年) によれば，1863 年に統一ルールが制定され，近代スポーツとして変身を遂げるまでの間，フットボール (蹴球) はイギリスの民衆にとって最も人気のある球技であったのである．すなわち，それは㋑荒っぽさが売り物の競技であり，参加人数の制限もなく，殴ったり，蹴ったりするのも自由であったことから，試合のたびに死傷者が出ることも珍しくはなかったこ

と，㊐専ら下層階級の競技とみなされており，紳士たる者のなすべからざるものとされてきたこと，㊅権力者や教会関係者はそれぞれの思惑から，民衆のフットボール熱を抑えようとしてきたが，そうした試みはことごとく失敗に終ってしまったこと，である．

これらのことはまた，Magoun の著書の目次に見出されるのである．

1 国王は禁じ，民衆は蹴った．この危険に満ちた愉しみ！ ——最古の記録から中世末 (1500 年) まで

2 流血と破壊！ 国法も安息日の掟も何のその……——文芸復興期から 1642 年まで

3 シェイクスピアの芝居にも登場——「蹴球ボールのように」蹴ったり蹴られたり——1642 年までの戯曲

4 徒弟のあいだで，農民のあいだで，蹴球人気は衰えず——共和制時代および王政復古期 (1702 年まで)

5 「ボールは高空に虹の橋を架けた」(ワーズワース)——18 世紀から 19 世紀 (1845 年) まで

6 3 度目は退学！ オックスフォードもケンブリッジも禁じた——大学における蹴球

7 手の使用を許すか？ 調整成らず，サッカーとラグビーへ——パブリックスクールと 2 つの「協会」

8 断食と悔悛の前には羽目をはずして——告解火曜日の蹴球

ところで，当時の蹴球がどのようなものであったかを知るためには，1888 年にアッシュボーン (ダービシャーの小さな町) での蹴球試合の見物記録が役に立つ (Magoun, 前掲書，p. 166-170); ……問題の競技のルールはいささか奇妙なものである．第一に，各チームの人数には制限がない．町の中央に橋があるが，この橋の北側に住む人は皆一方のチームに属し，橋の南側に住む人は皆もう一方のチームに属するのだ．ゴールは互いに 3

マイル離れており，2つの粉碾場にあるのだが，どちらも町から約1マイル半のところにある．ゴールを主張するには，ボールを粉碾場に付けるだけではなく，競技者が水車用貯水池を泳ぎ渡って自分で建物に触れなければならない．いま述べたような仕方でゴールを獲得した者は10シリングをもらう…….試合開始時刻と定められた2時の数分前に，私は問題の橋の方へぶらぶら歩いていったが，試合開始の模様を見物しようと大勢の人が集まっているのであった．暫くして，幾つかの集団をなした男たちが橋の近くの，これまで誰もいなかった草原に繰り出してきた．彼らは大抵，死闘に赴くかのような扮装であった．つまり，鋲を打った厚手の靴をはき，下にパッドを入れて革の脚絆を巻いていたのである．200人を超す競技者の大部分が草原の中央に集合すると，一同は務めを果すよう熱弁をふるっての要請を受けた．古い教会の時計が2時を告げると，ボールは宙に高く投げ上げられ，競技が始まった……ボールは他のボールとは違っていてコルクで出来ており，厚くて丈夫な革で覆われていたが，その革は赤，白，青に塗られており…それで，ボールが2，3度水に浸かった後は，第一に遠くに蹴り飛ばすのも，第二に打っ叩くのも容易なことではなかった．ボールが再び地面に触れると，人々はそれを目がけて突進し，互いに相手を思う存分蹴ったり殴ったりした……;

それでは，こうした蹴球が今日のフットボール (Association Football 略して Soccer) に変身を遂げることになった経緯はどうであろうか．

この点についての Magoun の記述は次の通りである (p. 138-147); 数々の記録に照らして見てきたように，非公式な形の蹴球が（非公式の度合の差こそあれ）昔からイングランド全土で行われてきたが，協会式（サッカー）及びラグビー式蹴球（ラグビー）という近代の重要な競技は，内容が明確でなく，もっと古い，そして恐らくは極めて多様化した諸競技を組織統一したところに成立したというものではなくて，一方ではウエストミン

スターやチャーターハウスなどロンドンの学校で，また他方ではラグビー（ウォリックシャー）の学校で行われた学校式蹴球をめぐって発達したルールを体系的に調整したことに基盤を置くのである……つまり 1860 年以前には，クラブ対抗の蹴球というものは存在しなかったが，それには，ほとんどすべての地域社会がそれぞれ違ったルールで競技をしていたという，もっともで明白な理由がある．しかし，多数の蹴球クラブが誕生した結果，競技が栄えることになるとすれば何らかの標準化が必要である，ということが明らかになった．1863 年に，ジョン・D・カートライト氏は蹴球クラブを結成することが現状では不可能なことを力説する一連の論説を書き，学校と大学の代表者が広く受け容れられるような，小異を捨てて大同に就くルールの体系を作成するよう提唱した．会合が開かれたが，地域的伝統の誇りがこの最初の会合の議事の妨げとなった．しかし，同じ年に，首都の一部のクラブが会合して，規則を作成するのに成功し，その後間もなく解散して蹴球協会を結成することになった．困難な問題が生じ，論議はボールを持ち運んでよいかどうか，一言にして言えば，手を使う型の競技を採るべきか，手を使わない型の競技を採るべきかという点，そしてまたトリッピング，チャージングおよびハッキングを認めるべきかどうかという点を中心になされた．「いかなる競技者もボールを持ち運ぶべからず」および「トリッピングもハッキングも許されず，いかなる競技者も手を用いて相手を摑みまたは押すべからず」という規則は，ラグビー式競技の支持者にとってはあまりにも思い切ったものであった．最初は新規則に従う意向を示していた多数のクラブが，ここにおいて手を引き，1866～67 年には協会の加盟クラブとして留まったのは 10 だけであった．しかしながら，新規則を奉ずるグループの行う試合に寄せられた関心に奮起して，協会は新たな努力をつくした．規則の重要な変更がなされ，協会式競技（Association Football）は他の様々な手を使わない競技といっそうよく似たものとなった．……こうした協議の結果，1867 年に回状がブリテン島および

アイルランドのすべての判明しているクラブに送られ，規則を修正する権利を与えた上で，協会に加盟し支持するよう要請した．……1868年には『蹴球年鑑』が初めて現れ，蹴球協会の成功は確実なものとなった．その影響はまず連合王国全土に広まり，そこから世界各地に波及して行ったのである；

また1871年には，第1回の全英選手権大会 (FA Challenge Cup Competition, 略称 FA Cup) が開催され，1874年には入場料が徴収されるようになり，1885年にはクラブチームがアマからプロに衣替えすることが認められ (協会内にアマとプロが並存)，1888年にはそのプロのクラブチームを財政的に援助するために，イングランド北部に蹴球リーグ (Football League) が発足することになったのである．この蹴球リーグは1892年に2部リーグ，1920年に3部リーグ，1958年に4部リーグを傘下におさめるまでに発展し，今日に至ったのである．

同時にルールの改正，手直しも進められたのである．たとえば，1874年にすねあて (shinguards) の着用が認められ，1875年にはクロスバーが導入され，1882年にはタッチラインが引かれ，1889年にはレフリーにフリーキックの裁量権が与えられ，1891年にはゴールにネットがはられ，1893年にはゴールキーパーに対するチャージング行為が制限され，1902年にはレフリーにペナルティーキックの裁量権が与えられたのである．

プロスポーツとしてのフットボール

Football Association が主催する FA Cup は当初，パブリックスクール出身者で構成するチームが優勝を独占していたけれども，次第に労働者チームが台頭し，1883年にはランカシャーの製粉工場の労働者チームが初優勝を遂げたのである．

それにつれて観客動員数も増え，1885年には2万7千人であったもの

が，1893 年には 4 万 5 千人，1893～1903 年には平均 8 万人に上ったということである (Magoun, 前掲書，訳者解説，p. 215-216).

このように協会式フットボール（以下フットボール）が労働者階級に普及することになった背景には，英国国教会の司祭 (priests) の活躍があったと言われている．すなわち，㋑教会への人材供給源に変化が生じ，それまで伝統的に数の多かったインテリ層が減少する一方で，体力派 (hearties) が増加し，それが結果的に "Mascular Christianity" の提唱と結びついたこと，㋺自助 (self help) を説くビクトリア朝の道徳律と相俟って，当時の労働者にみられた悪習を断ち切り，体力の増進を図るためにはスポーツが一番と考えられたことである．すなわち，フットボールは教会によって道徳教育の一環として位置づけられたのである (Wagg, 1984).

その結果，1880 年代までに各地に教会チーム (church team) が結成されることとなり，たとえば，Aston Villa, Bolton Wanderers, Wolverhampton Wanderers, Southampton, Everton といったチームは今日に至るまで，その名をとどめているのである．

それに引き続いて，West Ham United, Manchester United, Arsenal, Stoke City, Sheffield United, Crewe Alexandra, Leyton Orient, Millwall, Coventry City, Reading, West Bromich Albion といった職域チーム (work team) もまた，相次いで結成されたのである．

こうしたクラブチームがプロのチームとして発足するのは 1885 年のことであるが，それは「財政的に存続が危ぶまれた地方のクラブチームの救済」という大義名分のもとに，辛うじて承認されたのである．

しかしながら，Football Association には本家意識の強いアマチュアチームも多数加盟していたことから，その実施にあたっては次のような厳しい条件がつけられたのである．

①各クラブチームの代表責任者及び理事者たちは，社会的責務として無給でチームの運営にあたることが望ましいとされ，実体はともかくとして，

意識の上ではあくまでアマチュアであることが要求されたこと，②クラブ側の一存で選手を他のチームに譲渡したり，マイナーなチームに降格させたりすることができ，しかも契約を一方的に破棄しうる権利をもつなど，クラブ側に有利な制度である retain-and-transfer system が導入されたこと，③選手の給料の上昇を抑えるために，上限を設けた maximum wage restriction が適用されたこと，である．

その結果，選手 (players) たちは“プロ”(professional) と言っても名前ばかりであり，試合があるときにだけクラブチームによって雇用されるような扱いであったことから，身分的には季節労働者と同じであった．

しかも圧倒的な買手市場のもとでは（予備軍を多数かかえている状況では)，きわめて不安定な身分であったのである．すなわち，シーズンが終了しても，来年度の契約が結ばれるのかどうかは明らかでなく，ときには本人の承諾がないままに他のチームにトレードに出されたり，契約に異議を唱えたりすると一方的にマイナーなチームに落とされてしまったのである．それがいやならば，やめるしかなかったのである．

勿論，給料面でも恵まれておらず，大半の選手の収入は労働者が工場や建設現場で稼ぐ手間賃よりも多少マシな程度であったのである．たとえば1930年代に，Everton の花形選手 Bill Dean がアメリカのプロ野球選手 Bave Ruth と会う機会があったとき，Ruth は「Dean が週給 8 ポンドの基本賃金しかもらっていない」ことを知って，“あまりの安さ”に二の句が継げなかったとのことである．また 1930 年代，Millwall が Cup Final に勝ったとき，クラブチームは 7,000 ポンドの収入を得たのに対して，選手たちが手にした報酬は 2 ポンドと 5 ポンドの国債が各 1 枚とのことであった (Wagg, 1984).

こうした状況は，多くのクラブチームが㋑営業利益をあげることよりも，チームが良い成績をあげることに重点を置いていたこと，㋺オーナーである地方の名士たちは (local bourgeois family)，赤字覚悟でチームの

運営にあたっており，むしろそれが自らの社会的責務であると考えていたこと，によるものと思われる．

たとえプロのクラブチームであっても，それが「金の卵を産む鶏」ではなく，社会奉仕の一環としてプレイ (play) することが義務づけられた集団であれば，選手たちもまた，「金のためではなく，純粋にスポーツを楽しむこと」で自分自身を納得させなければならなかったのである．

さらに FA 並びに Football League のお偉方は，リーグ発足の当初から，フットボールが社会的に高く評価されることを望んでおり，“Establishment” に受け入れられるためには，「スポーツマンシップを堅持することが肝要」と考えていたのである．その結果，“勝つためには手段を選ばず” といったプロチームの勝利至上主義にはきわめて批判的であり，たとえば，“offside trap” といった作戦の採用についても，「スポーツマンらしくない」と公然と批判していたのである．

こうしたメンタリティ (mentality) はクラブの運営にも表われており，フロントと現場といった区別もないままに，言わば素人のフロント (director あるいは彼らで構成される委員会) がチームの編成，トレード，新人の発掘，契約の更改，営業，財務といった一切合財を取りしきっていたのである．そのためか，プロチームと言っても，シーズンにそなえて特別なトレーニングをするわけでもなく，また選手が集まってチームプレイ (team play) の練習をするといったこともなかったのである．「試合が始まってしまえば，選手まかせ」であり，選手たちもそれを望んでいたのである．さらに言えば，「綿密な作戦をたてて試合に臨むことは，選手の持ち味を殺すことになる」とさえ考えられていたのである．

こうしたクラブチームが所謂“プロ”らしくなるのは第 2 次大戦以後のことである．具体的には，冷戦のなかでスポーツと政治の結びつきが強まり，フットボールには英国の国技としての役割が与えられると同時に，国

際舞台での活躍が求められることになったのである.

しかしながら，対外試合の復活は早々に，英国チームが世界のトップレベルに後れをとっていることを英国民に知らしめるという皮肉な結果になってしまったのである.

このショッキングな出来事は，1953年英国チームが遠征してきたハンガリーチームに3対6で敗れたことであり（「英国本土では不敗である」との神話の崩壊），しかも6ヶ月後のブダペストでの再試合でもまた，1対7の大差で返り討ちにあってしまったのである.

このことは勝負に徹しきれないアマチュア的なフットボール観との訣別をもたらすことになったのである．具体的には，個人技よりも組織プレイの重視，体力よりも技術の重視，フロントと現場の分離，監督 (manager) 制度の導入となって現われたのである.

一方，国内では大衆消費社会の到来とともに，フットボール選手を宣伝媒体に使用しようとする商業主義 (commercialization) の攻勢が強まり，「フットボールが金になる」ことを選手たちに直接，間接的に伝えたのである.

さらに長年の組合闘争を通じて，選手たちを所属クラブチームに縛りつけていた maximum wage restriction (1961年) 及び retain-and-transfer system (1963年) がようやく廃止されることになったのである.

特に厄介であったのは後者であり，選手たちを "soccer slaves" の境遇から救い出すことになったのは，George Eastham が所属チームの Newcastle United を相手どって，「retain-and-transfer system の違法性」を申したてた裁判であった．すなわち，彼が他のチームに移ることを望んだのに対して，Newcastle United がそれを認めなかったために裁判沙汰となったのである．これまでは選手側の泣き寝入りであったが，選手組合 (Professional Footballer Association) はここを先途とばかりに積極的に支援したのである．この制度が如何に苛酷なものであったかについては，

1952 年のシーズンを例に取ると，997 名の登録選手のうち，585 名はクラブ側が契約更改の意思表示をしないかぎり，シーズン終了とともに解雇される運命にあったのである (Wagg, 1984).

1963 年に下された判決は，「retain-and-transfer system の違法性」を認めたものの内容的には不十分であり，選手側に完全な契約の自由が与えられるのは 1970 年代後半のことであった.

こうした桎梏が取り除かれた結果，選手たちの給料は大幅に上昇することになったのである．しかしながら，他方では観客動員数の減少が続き，経営的に苦しくなったクラブチームはこれまでの建前を放棄して，コマーシャリズムの流れを受け入れざるをえなくなったのである.*

フーリガニズム (hooliganism) の背景

英国フットボールの主役は Football League であるが (現在は 4 部リーグに分かれて 92 チームが参加)，それが最大の観客動員数を示したのは，1940 年代後半から 1950 年代にかけてのことであった.

この時期は大観衆の割りには騒動が少なかったと言われているが，例外は Glasgow であった．そこでは不況や失業といった経済的な問題に加えて，プロテスタントとカトリックの宗教的な対立が絡んでおり，特に，Glasgow Rangers と Glasgow Celtic の試合は騒動になりやすかったのである.

1960 年代に入ると，比較的平穏であった England にもフーリガニズムの波が押し寄せてきたのである．当時の流行は "pitch invasion" (観客が

* Dunning, Murphy & Williams (1988) によれば，Football League の観客動員数は 1949-50 年のシーズンが最高で約 4,000 万人，1950 年代は年平均で 3,300 万人，1960 年代は英国でワールドカップ (W 杯) があり，多少持ち直したが 2,500～2,900 万人，1970 年代は 2,400～2,500 万人，1980 年代には 2,000 万人の大台を割ってしまったとのことである.

試合中にグランドに入り込むといった行為）であるが，その流行のきっかけは 1960～61 年のフットボール・シーズンにおいて，Sunderland が Tottenham Hotspur との試合で同点に追いついたとき，喜んだ若者の一団がグランドを駆け抜けていく後ろ姿がテレビで放映されたことである．またこうした行為は，負け試合をしているチームのファンが試合を妨害し，あわよくば“no game”に持ち込みたいという切なる願いによることもあれば，ファン同士の小競合いのなかで逃げ場を失った若者が，グランドに飛び出してきただけのことかもしれないのである．

いずれにしても，そうしたファンの行動がエスカレートして，フットボールの応援団を送迎する特別仕立ての列車やバスが打ち壊されたり，試合の展開とはかかわりなく，競技場の内外で乱闘が繰り返されて多数の死傷者が出たり，とばっちりをうけた住民から警官隊の出動が要請されるといった事態になると，最早見過ごしにはできないのである．

こうした事態に対する大方の関係者の認識は，「これは一握りの“跳ね返り”によるものであり，大多数のファンとは無縁の行為である．前者に対しては断固たる処置をとるべきである」というものであった（内務大臣 James Callaghan の発言，The Times, 28 th, March, 1969).

また，「この種の問題に対して，如何に対処すべきか」ということに関する有識者の見解は，Harrington Report (1968 年) と Lang Report (1969 年) にまとめられたのである．

前者はフーリガンの心理状態に踏み込む形でレポートをまとめており，「こうした若者たちはフットボールに関して驚くべきほどの知識を有しており，クラブチームの勝敗が直ちに彼らの行動に跳ね返ってくるような心理状態に陥っている．彼らは決して騒動を目的に競技場にやってくるような若者たちではなく，正真正銘のフットボールファンである」と指摘したのである．無論，こうした議論は警察当局やフットボール試合の主催者の受け入れる所ではなく，学者やインテリの戯言とみなされ，無視されてし

まったのである.

一方，後者は「厳罰主義をとるように」と勧告したのである．また具体策としては，たとえば，観客席により多くの警官を配置するとか，立見席を減らして椅子席を多くするように，といったことを提案したのである.

しかしそれもまた，「そうしたことは既に大きなクラブチームでは実証済みである」と一蹴されてしまったのである．警備当局や主催者が求めていたのは，グランドの周囲に濠を設けるとか，有刺鉄線をはりめぐらすといった内容であったのである（今日ではこうした光景は珍しくないとのことである).

ところで，こうした若者たちの乱暴狼藉は，1940 年代後半から，憂慮すべき社会問題の1つとして論じられてきたのである．当初は戦争中の父親の不在，家庭のしつけの不在といったことに原因が求められたけれども，何時しかその矛先は“むちうち刑”(flogging) を廃止した Criminal Justice Act に向けられることになったのである．たとえば，Goddard 卿は上院において (1952 年 7 月)，「今日，我が国が直面する問題の1つは犯罪の増加であるが，むちうち刑の廃止という愚行が，若者たちのこうした乱暴狼藉をもたらしたのである」と演説したのである.

「問題はそれほど単純ではない」と承知のうえで，人びとがこの種の八つ当たり気味の発言を受け入れた背景には，旧来の若者観では理解しえないタイプの若者たちの出現があったのである.

すなわち，1950 年代には Teddy Boys (Teds) と呼ばれる一団が出現し (当初はロンドンに住む下層労働者階級の若者たちで構成されていた)，仲間同士で争いを繰り返したり，映画館の座席をこわしたり，あたりをかまわずにボリュームをあげてダンスに興じたり，ときには外国人移民を攻撃するなど，大人たちのひんしゅくを買っていたのである．しかしながら，彼らの行動は基本的には自らの欲望の充足を目的としたものであり，

"football hooliganism" とは直接結びつくことはなかったのである．その人目を惹く服装もまた，普段の生活の中では充たされない社会的地位を贖う試みとして解釈されたのである．

1960 年代に入ると，Mods と呼ばれる一団が登場し，Rockers との間で対立，抗争を繰り返したのである．彼らもまた，Teds と同様，「大衆消費社会の申し子」であったが，フットボール場はその活動の舞台には含まれていなかったのである．

ところが 1968 年になると，Mods とはまったく異質なタイプに属する Skinheads が登場してきたのである．彼らはかつての労働者階級の価値観を前面に押し出し，"男らしさ" を売り物にしたのである．そして，彼らの価値観に反すると思われる者には徹底的に攻撃を仕掛けたのである（たとえば，移民してきたパキスタン人，学生，同性愛者である）．こうした Skinheads の主たる活動舞台はフットボール場であり，彼らはそこを自分たちの守るべきテリトリー (territory) として位置づけたのである．そのために，Skinheads は「hooligan の代名詞」とされてしまったのである．このことは彼らと同じ階層の若者をフットボール場に引き寄せる一方で，彼らより上の階層の人たちを遠ざける結果となったのである．

フーリガニズムとは何か

"football (soccer) hooliganism" として一括される現象が，何故 1960 年代以降増大したのかということをめぐって，多くの研究者が自説を展開してきた．次にそのいくつかを紹介する．

① 疎外された労働者階級の若者たちの抵抗

Taylor, I. R (1971) は，「本来フットボールは労働者階級のスポーツであり，選手もまた，我が町の代表といった存在であったが，近年とくに顕著となったクラブチームの営利主義（裕富な社会層をターゲットとした営

表 2. 有罪とされた 497 名の職業分類

School or apprentice	79
Unskilled/labourer	206
Semi-skilled	112
Skilled	50
Salesman/clerical	19
Professional/managerial	2
Not known or unemployed	29
Total	497

(Harrington Report より, Taylor 1971)

業方針) 及び選手のエリート化は, 労働者階級の若者のそうした一体感を逆なでするものであった. フーリガニズムはフットボールを自分たちの手に取り戻そうとする彼らの抗議運動である」と主張したのである.

たとえば, 1968 年の Harrington Report は, 資料として, 有罪とされた 497 名のフーリガンの職業の内訳を報告しているが, それによると, 60% 強が伝統的な労働者階級に属する若者たちであった (表 2).

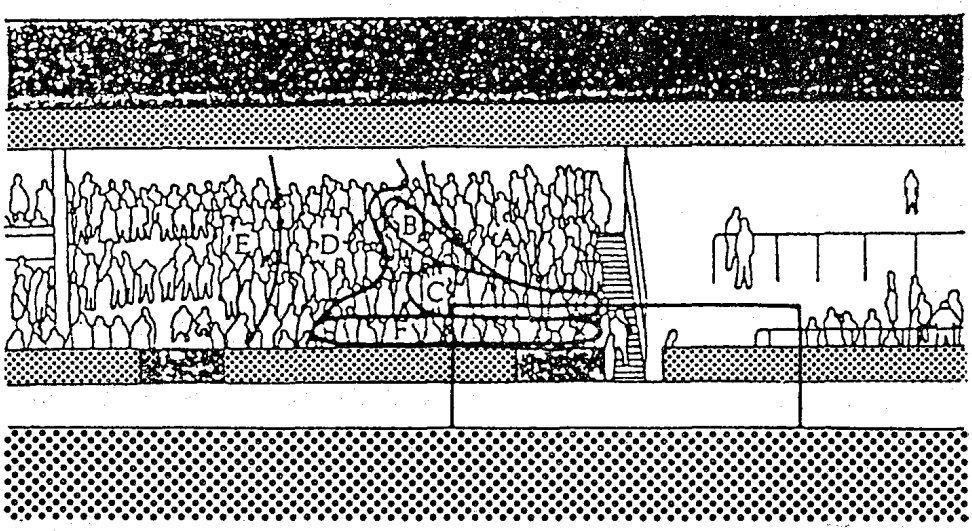
この結果が Taylor の説明を裏付けているとするならば,「フーリガニズムの解決策はこうした若者たちの心情を汲みとって, クラブ側と若者たちの関係の修復を図ることであり, 具体的にはかつての participatory democratic relationship を復活させることである」といったことが, その結論となる筈である.

しかしながら, フットボール界が既に "観戦するスポーツ" (spectator sport) としてテレビのスポーツ番組に取り込まれており, しかも労働者階級内部の階層分化が進み,「土曜日の午後の楽しみはフットボールだけではない」といった現状において, クラブチーム発足当時の幻想を醸し出すことが果して可能であるのかどうか, 仮にそれが可能であったとしても, フーリガニズムの解決になりうるのかどうか, 甚だ疑問である.

② 儀式化された攻撃性

若者たちの暴力沙汰を曰く言い難い凶暴性 (unexplained savagery) に帰してしまうマスコミの論調に対して，Marsh, Rosser & Harré (1978) はフーリガンとの面接や彼らの行動観察によって，まったく異なる結論を導き出したのである．すなわち，㋑彼らの行動は了解可能なものであり，彼らなりの意味づけがなされていること，㋺彼らの行動は一見無秩序に思われても，ルール (rule) に基づいたものであること，㋩彼らにとって，フットボール場は普段の生活の中では充たされない満足感やある種の社会的地位や役割を提供する場となっていること，を指摘したのである．

さらに Marsh らは彼らの間に，㋑chant leaders…言わば応援団の団長，㋺hardcase (aggro leaders)…闘争の主役，㋩nutters…命知らずの無法者，㋥hooligans…攻撃性をユーモアでふくらますことのできる者（仲間を面白がらせる道化者），㋭organizer…遠征試合についていくときには，電車やバスの手配をしたり，入場料の値上げや監督の罷免を要求する抗議行動などを組織する者，といった役割の分担があると同時に，年齢に応じて，①Novices (見習い中の者．10～11 才)，②Rowdies (一人前とみ



(注)　A: Rowdies　C: Town Boys　F: Novices

図 2.　フットボール場のフーリガン
(Marsh et al., 1978)

なされ，能力・適性に応じて実質的な役回りを演ずる．平均年齢は 15 才)，③Town Boys (Rowdy の段階を卒業した者のうち，仲間内で高い地位と評価を得ることができた者．年齢は 19～25 才)，といったキャリア (career) 形成を指摘したのである (図 2)．

ところで，英国スタイルのフットボールはキックアンドラッシュ戦法にみられるように，タフさ (toughness) と体をはっての試合ぶり (physical commitment) が売り物であった．それはまた，英国人 (特に労働者階級の人びと) が理想とする“男らしさ”(masculinity) を体現したものであったことから，フットボール場に足を運ぶ男たちにとって，そこは男同士の友情 (male bonding) を確かめあう場所でもあった．それ故，フットボール場ではボールを使用した模擬戦争 (mock battle) が行われても，自分たちが殺しあいをすることはありえない，と考えられていたのである．

Marsh, P (1975) は以上のような考察に基づき，㋑フーリガンの行動はマスコミが喧伝するほど常軌を逸したものではなく，そこには予め歯止めが設けられていること，㋺彼らの攻撃性は殺傷を目的としたものではなく，一種の儀式 (aggro) である，と主張したのである．

その結果，「そうした行為を根絶しようとして刑罰を重くしたり，規制の強化を試みることは逆効果であり，むしろ“aggro”が社会秩序の維持にとって安全弁となっていることを重視すべきである」というのが，彼の結論であった．

しかしながら，現状は儀式と呼ぶにはあまりにも危険な状況である．その分岐点となったのが 1974 年 9 月の Manchester United と Cardiff の試合であり，既に“リーグ随一”との悪名を轟かしていた United の遠征試合は，「フーリガンの世界での天下分け目の戦」として両チームの試合以上に，マスコミの注目を浴びたのである．

これ以降，試合はそっちのけで，“騒動自体が目的”といったフーリガニ

ズムが横行することになり，使用される武器もまた，レンガやコンクリートの塊から火炎びん (petrol bomb) へと変わり，騒動の最中に刺し殺される者も出てきたのである．まさに相手をやっつけるためには，手段を選ばないといった状況に立ち至ったのである．*

③ “男らしさ”へのこだわり

Dunning, E (1985) によれば，“football hooliganism” は 1960 年代に突如として社会問題になったのではなく，フットボールという競技につきものの行為であった．それは協会式フットボールとして近代スポーツに変身してからも同様であった．しかしながら，その発生件数には増減があり，第1次世界大戦以前は比較的高い水準で推移し，その後 1950 年代後半までは低減し，1960 年代以降，再び上昇を示したのである．その騒動の主役は依然として社会的に低い階層に属する若者たちであったが，次第に失業中の若者の占める割合が増加してきたのである．

ところで，今日のフーリガニズムの特徴は，組織としての体裁をととのえてきたことである．“Skinheads” はその風采からしてフーリガンと結びつけられやすかったけれども，組織そのものはルーズな寄せ集めであった．その結果，警察当局や主催者側の警備体制の強化とともに，彼らはフットボール場から追い出されていったのである．

一方，彼らの後継者グループはますます先鋭化し，戦闘部隊 (fighting

---

* Lewis, J. M. (1982) によれば，“fan violence” は次の5つに分類される．① Verbal assaults …… ファンが選手，相手チームのファン，審判，警官を野次ったり，下品な言葉を浴びせる．② Disrupting play …… ファンがグランドに飛び出して，試合を中断させる．③ Throwing missiles …… ファンがレンガの破片やビール缶，金属片，びんなどを選手や相手チームのファン，審判，警官に投げつける．④ Fighting …… ファンが選手や相手チームのファン，審判，警官に殴りかかる．⑤ Vandalism …… ファン同士が共謀して，商店や公共の建物の破壊を行う．

表 3. West Ham ICF の中核メンバーの社会階層*

階層分類	人数	%
1. Professional, etc.	0	0.0
2. Intermediate	8	5.7
3. Skilled non-manual	2	1.4
Skilled manual	34	24.1
4. Partly skilled	10	7.0
5. Unskilled	25	17.7
Unemployed	32	22.7
Unclassifiable	30	21.2
Total	141	

* Registrar General's classification による分類
(Dunning, et. al., 1988, p. 189 より)

crew) として編成がえされたのである．こうした戦闘部隊は "super hooligan gang" とも呼ばれており，具体的には West Ham United の "Inter City Firm (ICF)", Leeds の "Service Crew", Arsenal の "Gooners", Millwall の "Bushwhackers", Leicester の "Baby Squad", Chelsea の "Headhunters" などが含まれる．

このうち最初に結成された ICF は，その名前が示すように，特別にチャーターした列車やバスで相手の本拠地に乗り込むといった従来の方式にかえて，"Inter City" の列車便に紛れ込み，しかもそれとわからないように一般の乗客と同じ服装で行動したのである (表 3)．この作戦は警備当局並びに相手方の目をあざむき，意表をつくこととなり，まんまと敵の本拠地を落とし入れることに成功したのである．これは West Ham United の大勝利として，後々まで語り草となった事件であった (当日の試合結果とは無関係であるが)．その後，他のチームもこうした作戦を真似るようになり，結婚式に出席するような服装で敵地に乗り込むといった奇襲作戦もとられたのである (Murphy, et. al., 1990).

Dunning はこうしたフーリガンの行動を「英国社会において強く支持されてきた (労働者階級において顕著であるが) "男らしさ" (masculini-

ty) のイメージを体現したもの」と考えており，彼らが競技場の内外で行う戦争ゲームもまた（相手陣地を占拠すること，多勢に無勢であっても最後まで闘うこと，仲間を見殺しにしないこと），それをシンボリックな形で表現したものである，と主張したのである（但し，彼はこの種の問題を文明化の過程のなかの一側面として捉えているのである）.

しかしながら，労働者階級の若者たちは何故それほどまでに“男らしさ”にこだわるのであろうか．そうでもしないと，自らのアイデンティティ (identity) が保ちえないのであろうか.

Harrison, P (1974) によれば，週給が 15～40 ポンドの若者たちにとって，毎週 5 ポンド以上をフットボールのためにつぎ込むことは，経済的にも楽なことではないように思われる.

それにもかかわらず，「土曜日の午後の楽しみはこれしかない」と，フットボール場へ出掛けていくのは何故であろうか．㋑ボールを介した模擬戦争としてのフットボールの魅力，㋺自分たちの代表である選手との一体感，㋩長時間にわたって，行動を共にすることで確認される仲間意識，㋥フットボール場がもつ一種の解放区といった雰囲気，㋭“aggro” そのものが目的，といったことが考えられる.

さらには，警察や主催者の過剰警備がフーリガニズムを助長しているといった批判もある.

たとえば，前述の Manchester United のファンの 1 人は次のように述べている; Manchester から Cardiff まで，我々は警官に挑発され通しであった．Manchester の駅ではこづきまわされ，列車に乗れば，「座っていろ，タバコは喫うな」とどやしつけられる．Cardiff に着けばついたで，犬をつれた警官隊のお出迎え．フットボール場へと歩き出せば，「歩道に戻るように」と押し戻される．ようやくのことでフットボール場に辿りつけば，ここでも手荒いご歓迎．逆らえば，有無を言わせずに逮捕されてしまう．友達もそれで何人かあげられた．狭いスタンドに押し込められたう

えに，敵方には野次られる．好い加減に頭にきて，やっつけてやろうとすれば，フェンスが邪魔をしている．そうこうしているうちに，レンガやコンクリートが飛んでくる．あちこちで怪我人が続出する．やりかえそうとすれば，警官が制止する．これでは帰りがけに一発かましてやらなければ，腹の虫がおさまらない (Harrison, 1974).

こうしたフラストレーションは競技場内で発散されなければ，沿道の住民に向けられたり，自分たちが送迎用にチャーターしたバスや列車，駅などの公共物の破壊に向うことになる．

さらにこれがタブロイド紙の手にかかると，“Savages”，“Animals”，“mindless morons” といった見出しとなって現れる．マスコミが競って取りあげることにより，社会的な認知をうけ，そうしなければならないような印象をつくり出す．また，「フーリガンの番付」といったものによって，自分たちの行動がマスコミにどのように評価されているかが明らかになれば，積極的に参加したいと望む者も出てくることになる．自分たちが世間の注目を浴びるからである．これが“男らしさ”の正体であるとするならば，何とも物悲しいことである．

フーリガニズムの行方

フーリガニズムという現象を単純な因果図式の説明に求めることは難しい．たとえ規制を厳しくし（立見席の撤廃，ID カードの携帯，アルコール飲料の販売禁止など），警備体制を強化しても問題の解決にはならない．騒動がフットボール場から，警備体制が手薄な周辺地域へと拡大していくだけである (Morris, 1985).

他方，フーリガニズムの原因と思しきものとしては，㋑若年労働者の失業，㋺若者たちの社会的閉塞感，㋩マスコミの煽り，㋥英国社会に固有の階級制度，㋭外国人移民の問題，㋬極右団体の働きかけ，などが挙げられるけれども，これらが相互にどのように関連づけられるのかが明確に示さ

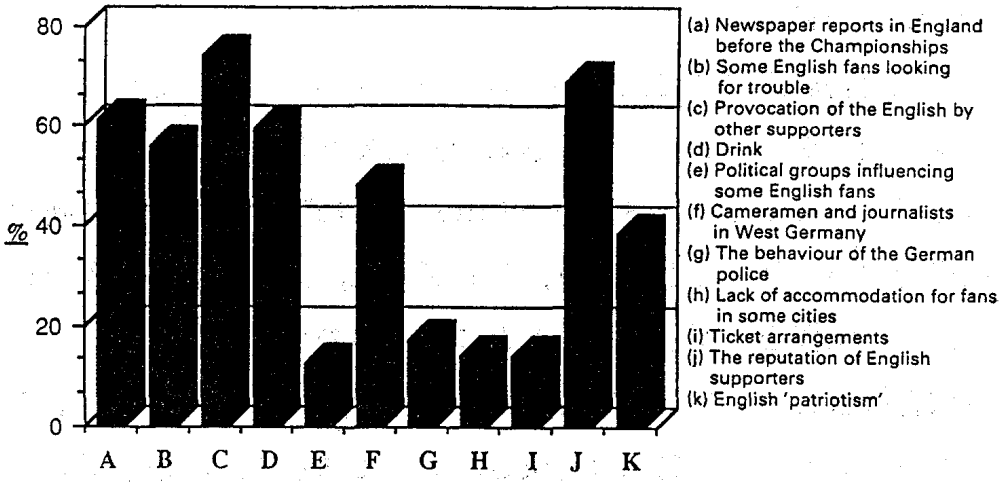


図 3.「何故，騒動が起きたか」についての英国人ファンの理由づけ (Murphy et. al., 1990)

れないかぎり，問題の解決にはなりえない．

しかも，フーリガニズムは英国だけでなく，ヨーロッパ諸国においても大きな社会問題となっているのである．

たとえば，1988年の European Championship (西ドイツで開催) は当初から，"Hooligan Championship of Europe" と喧伝され，大衆紙がフーリガンの番付を作成するなど (上位は英国，オランダ，西ドイツ，イタリアである)，大規模な衝突が予想されたのである．そのために警備には万全が期され，問題を起こしそうな者たちを事前に拘留するなど徹底的な対策が講じられたのである．それにもかかわらず，騒動が頻発し，その主役は相変らず英国の若者たちであったのである．彼らは地元西ドイツのフーリガンの標的にされる一方で (「英国のフーリガンについて，その世評を確かめてみたい」といった動機から)，敵地における自らの行動を"愛国心の発露" (English patriotism) と位置づけていたのである (図 3)．

こうしたフーリガニズムの横行はゲームの主催者に多大な負担を強いる結果となっており，1988年の European Championship を主催した西ドイツは決勝リーグ (全部で 15 試合) の警備に 3,500 万マルク以上の出費 (入場料収入は 4,200 万マルク) を余儀なくされたとのことである (Mur-

phy et. al., 1989).

これは入場料収入だけでは最早やっていけないことを示しており，ますますテレビなどからの収入に頼らざるをえなくなるのである.

その結果，フットボールは“spectator sports”として一層の刺激と興奮の演出を求められることになり，それがまた，若者たちの興奮を高め，ファン同士の敵愾心を煽りたてることにもなるのである.

もし試合観戦をテレビだけにとどめ，観客を競技場に入れないようにすれば，フーリガニズムの問題は解決されるのであろうか．相手がいなければ喧嘩のしようもないが，観客のいない試合では興味も半減してしまうであろうし，選手もまた，やる気を失ってしまうと思われる.

この点について，Bryant, J (1989) はテレビスポーツ (televised sports) の“rough play”は視聴者の興奮を高めるけれども，それが好ましい形で解消されるためには，応援するチームが相手チームを正々堂々と(汚ない手段を用いずに) 打ち負かすことが肝要であると述べている．試合の一部始終がテレビに写し出されることから，視聴者は却って冷静になってしまうのかもしれない.

こうしたメディアとスポーツの関係は，今後のスポーツの在り方を考えるうえで重要な研究テーマである.

引 用 文 献

Bryant, J. 1989 Viewers'enjoyment of televised sports violence. In L. A. Wenner (Ed.) *Media, Sports, & Society*. Sage. p. 270-289.

Dunning, E. 1985 Sport as a male preserve: Notes on the social sources of masculine identity and its transformations. In N. Elias & E. Dunning (Eds.) *Quest for excitment: Sport and leisure in the civilizing process*. Basil Blackwell. p. 267-283.

Dunning, E., Murphy, P., & Wiliams, J. 1988 *The roots of football hooliganism: An historical and sociological study*. Routledge.

Harrison, P. 1974 Soccer's tribal wars. *New Society*, 29, 602-604.

Lewis, J. M. 1982 Fan violence: An american social problem. In M. Lewis (Ed.) *Research in social problems and public policy*. Vol. 2, JAI Press, p. 175-206.

Magoun, F. P. Jr. 1938 *History of football from the beginnings to 1871*. (忍足欣四郎訳「フットボールの社会史」 1985 岩波新書).

Marsh, P. 1975 Understanding aggro. *New Society*, 32, 7-9.

Marsh, P. 1976 Careers for boys, nutters, hooligans and hardcases. *New Society*, 36, 346-348.

Marsh,P., Rosser, E., & Harré, R. 1978 *The rules of disorder*. Routledge & Kegan Paul.

Morris, T. 1985 Deterring the hooligans. *New Society*, 72, 326-327.

Murphy, P., Williams, J., & Dunning, E. 1990 *Football on trial*. Routledge.

Taylor, I. R. 1971 Soccer consciousness and soccer hooliganism. In S. Cohen (Ed.) *Images of deviance*. Penguin Books. p. 134-164.

Wagg, S. 1984 *The football world: A contemporary social history*. Harvester Press.